
Preludes

ホワイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r e l u d e s

【Nコード】

N 2 9 8 3 W

【作者名】

ホワイト

【あらすじ】

これらの作品は、物語の冒頭だけを書いたものです。それぞれの話の続きは予定しておりません。

また、もしこれらの作品を読んで自分なりに続きが書きたいと思ったのならば、それを掲載される際にご一報頂ければ自由に書いてもらって構いません。

登場人物の名前等も自由に変更してください。

それではどうぞ、お楽しみください。

1・C・d・u・r（前書き）

タイトルのとおり物語の導入部分でしかないものですが、そこから自由にお話を創造してください。

それではどうぞ。

登場人物の名前

佐倉↓さくら

物井 天音↓ものい あまね

雲は青く晴れ渡った空を背景に、のんびりと流れて行く。

頬を撫でる風が心地よい。

景色は、思い出の中のものとして変わらないままだ。

九月の下旬、俺は、俺が生まれてから小学校低学年までを過ごした町の駅に、八年ぶりに降り立った。

駅の周囲にはほとんど何もない。あるのは畑と、民家がぼちぼち、そして駅前の食堂兼売店だけだ。コンビニなんてのはもっての外、そもそもこの町にコンビニなんてものが存在するのかどうか疑わしい。そもそも電車が一時間に一本しかないような場所にそんなものを求めるのが間違っていると思う。だが、都会から来た身には、これから暮らす場所にコンビニがないというのは結構辛い。

「ま、グチグチ言ってもしかたない、か。」

とりあえず駅から出ないことには何も始まらない。ということでホームを見渡してみるのだが……

「改札口はどこだ？」

駅、と言ってもホームしか見当たらないのだ。とりあえずホームの端まで行くと、ポストのようなものが立っていて、そこにこう書いてある。

『使用済のきっぷはこちらに入れてください』

……駅員はいない。まあそもそも駅員がいるような建物自体がないのだから当然といえばそれまでだが。

その箱に切符を入れ、駅の外に出る。改めて周囲を見渡してみるのが、やはり何も無い。いや、何も無いがあるか……くだらない言葉遊びをしているかもしれないので、オヤジにもらった地図を出す。「さて、じいちゃんの家にはどうやって行くんだ？」

地図をぱっと見た感じでは、駅のすぐ近くにあるように見えるのだが……よく見るとその途中の道の所々を波線が横切っている。さらに、その手書きの地図の右下の隅に『親父の家までは駅から6キロぐらいあるから、がんばれ』と添えてあった。

「……6キロだと！？ 歩けてか！？ しかもロクに日陰は無いぞ！？」

まわりが畑しかないということは、即ち日陰を作ってくれそうなものが無いということである。さらに今日はこの上ない晴天だ。ありがたくないことに日差しは容赦なく降り注いでいる。

「……嫌がらせかよ……あんのクソオヤジ……」

悪態をつきつつも、地図を頼りに歩き出す。正直一刻も早くじいちゃんの家に着きたい。風は吹いていて涼しいのだが、荷物が多い上に、照りつける日差しのせいで余計な汗をかいてしまう。

しばらく地図に従って歩いて来たが、おかしいことに次の目印が一向に見つからない。おまけにどうも鼻屑目に見ても、建物の数が減ってきている。これはまさか……地図が間違っている？ つまり……

道に迷ったようだ……

「ちくしょう！ なんで地図間違えてやがんだ！ あんのクソオヤジ！ だいたいどう考えても道を覚えてるわけがないやつを見知らぬ土地に放り出して、手書きの地図を押し付けて『がんばれ』はお

かしいだろ！」

だがどれだけ文句を言っても当のオヤジはここにはいないし、何か事態が好転するわけでもない。

「まいったな……」

とりあえずは道が分かりそうな人を探したい所だが、あいにく周囲に人影はない。仕方がないので、来た道を引き返すことにする。もしかしたら目印を見落としていた可能性もあるわけだし。

そして、来た道を引き返していく。だがどう見てもオヤジの地図に書かれている目印は見つからない。

「勘弁してくれよ……」

俺は途方にくれて、バス停のベンチに腰を下ろした。ちなみにこのバス停、一日に五本しかバスが来ないらしい。

そして、近くにあつた自販機でジュースを買って、それを飲んでみると、不意に誰かに声をかけられた。

「……あの、もしかして佐倉君？」

「え！？」

顔を上げると、そこにはこの近くの高校の生徒だろうか、制服を着た俺と同じ年ぐらいの女の子が立っていた。

「なんで俺の名前を知ってるんだ！？」

「やつぱりよくんだ〜！」

「俺の質問に答えてくれ！」

「え〜、わたしのこと覚えてないの〜？」

改めてこの女の子を観察してみる。背丈は普通ぐらい、やや長めの髪をそのまま垂らし、前髪はヘアピンで留めている。そしてくりくりした目でじつと俺のことを見ている………けっこうかわいいな、だが……

「すまんが全く記憶にない。」

「が〜ん……忘れちゃったんだ〜……」

……知り合いにこんな愉快な脳ミソをしているヤツっていたっけか？

「隣に住んでたのに……」

隣に住んでた……？

「……………物井か？」

「やったああ！ 思い出してくれたあ！」

どうやら正解らしい……

「本当に物井なんだよな？」

「そうだよ」

正直言つと、俺の記憶の中の物井天音は、こんなにテンションが高いやつでは無かったはずだ。

もっと引つ込み思案で、しょっちゅう泣いていた記憶がある。

「あの『泣き虫天音』だよな？」

「がーん！ がんばって泣き虫は克服したのに！」

女の子の目が潤みだした！

「だーっ！ 泣くんじゃねえ！ やっぱりお前は物井だ！ 間違いねえ！」

「うっうっ、信じてくれた？」

「この程度で泣くんだから間違いないだろ。」

「それで、どうしてよーくんがここにいるの？ そんなに荷物を持つて。」

「オヤジの書いた地図が間違つててじいちゃんの家が見つかんねえ。」

「そうなの？ 地図見せて？」

「ほい」

物井に地図を渡す。

「それで、どこが間違ってるの？」

「この目印が見つからねえ。」

「あゝ、このお店はね……去年潰れちゃったんだよ……」

「そりゃ見つからないわけだ……」

「それで、そんなに荷物がある理由は？」

「あー、いろいろあつてな……しばらくじいちゃんの所に厄介になるんだよ。」

「おおつ！ よーくんかむばっく！」

「……お前、英語になってねえ。」

「つてことはまたよーくんがお隣さんに……」

「まあそういうことになるわけだが……」

「あつ、つまりよーくんはおじさんの家に行こうとしてたんだ！」

「気づくの遅いよ！」

「よーし！ そしたらわたしが道案内してあげるよ！」

「……ちよつと不安だが頼むよ、なんせオヤジの地図は当てになんねえし……」

「まっかせなさい！ じゃあしゅっぱーつ！」

そして俺は物井の後について歩き出した。

日は傾いているが、まだまだ日没までには時間がありそうだ。

1・C-dur（後書き）

いかがでしょう？

インスピレーションが湧いたなら、それが最高です。

また、そうでなくても話の続きが気になるのではないのでしょうか？
その続きは、あなたが作ってください。

それではまた

2・A・m o l l (前書き)

二つ目です。

どはむむむ

2・A・m o l l

これで四度目だ。

付き合いだしたはいいものの、最後には『あなたとはもう付き合いえない』という言葉とともに、別れを告げられる。

自分自身は、いたって平均的な人間だと思っている。容姿も、頭の良さも、背の高さも、人との付き合い方も、どれをとっても人より劣っているとは思わないし、優れているとも思わない。

友人達も、自分に特に何か問題があるとは言わなかった。むしろ、そこまで同じような方をする方が不思議だと言っていた。

自分には何が足りないのだろうか。何がいけなかったのだろうか。それを探すために旅に出よう。冬であるが、より寒さの厳しい北へ向かって。

厳しい環境の中でこそ、きっと何かが見つかるに違いない、そう信じて。

自分の乗った列車は、いつもの駅を滑り出すように発車した。

見慣れた景色が後方へと流れて行く。足りない何かを見つけるまで、この街に戻ってくることは無いだろう。

この旅は、目的はあるが明確ではなく、目的地は最初からない、旅。

冬の、旅。『Winterreise』

2・A・m・o・l・l（後書き）

いかがでしたか？

今回、話の最後にタイトルをある程度限ってしまうような一文がついているのですが、削るに削れずそのまま残しました。

この一文がないと文章が締まらない、そう判断したためです。

ではまた

教会の鐘が出発の時報を告げる。

ボクは今日、生まれ育ったこの町を旅立つ。ボクの夢を叶えるために。

「……な〜に感慨に浸ってたんだよ！ フランツ！」
「うぎゃー！」

後頭部を叩かれた。

「ペーターか……やめてよ。」

「まあしばらく会えないんだし、最後の挨拶ってことでいいだろ。」
「もつと他の挨拶の方法はないの？」

「俺とお前の仲なんだし、こんなんでいいんじゃないの？」

「……せめてもうちよつとましな方法で挨拶して欲しかったよ。」

「気にすんなって、俺も寂しいんだよ。」

「……珍しいね、キミがそんなこと言うなんて。」

「そりゃあなあ、幼馴染と当面会えないんだから寂しくもなるさ？」

「心配しなくてもちやんと生きて帰ってくるよ。」

「いや、正直お前みたいにひ弱なやつが途中で野垂れ死にしないか心配で仕方がないんだよ。」

「余計なお世話だよ！ キミみたいな健康の権化から見たら誰だつてひ弱だろ！」

「ま、気にすんなって。……ほれ、お前の親も来たぞ？」

父さんと母さんが到着したようだ。なぜか隣の兄さんもいるんだけども……

「おーし、まあ余計なことは言わないぞ。頑張ってこいよ、フランツ。ウチの名前に泥を塗ったら地の果てにいても説教しに行くからな。」

「心配しなくてもそんなことしないよ、父さん。」

「冗談だよ、俺から言うことは『死ぬな』のただ一言だ。」

「……まあ死なないと思うけどね。」

「それは結構、……ほれ、かあさんも何か言っただけで。」

「フランツ、途中で帰ってきたら許さないよ？」

「……それはどういう意味で？」

「もちろん嫁さん見つかるまで帰ってくるなって意味だよ。」

「それはボクの旅の目的じゃない！」

「あつはつは！ 冗談に決まってるだろう！ まあ、あたしの本心はそっちのほうがよっぽど気がかりなんだけどねえ……」

「なんでそんな深刻な顔するのさ！」

「だってねえ……アンタ十七にもなるのに浮いた話の一つも聞こえてこないんだもの。親としては心配するに決まってるだろう？」

「それも余計なお世話！」

「ま、期待しないで帰りを待たせ。」

「……本心は帰ってきてほしくないとか？」

「まさか！ まあどつかに腰を落着けるんだったらそれでもいいんだけどねえ？」

「……もう出発していいかな？」

「……待ちなさい、フランツ君。」

「ん？ そういえばアルトゥール兄さんも来てたんだ。」

「忘れないでほしいね……これを持って行くといい。」

「これは？」

「救急袋。中に応急手当用の道具と、息の根を止めるための毒が入っている。」

「……なぜ毒？」

「まあ、いろいろ身の危険もあるだろうから、護身（？）用に……」

「なんでちゃっかり『（？）』があるのさ!？」

「もちろんそれ以外の用途にも使えるからだよ、ふふふふ……」
「そんなにヤバイ物？」

「一滴でどんな生き物でもコロリ……」

「……薬と間違わないようにしますよ……」

「絶対に間違えないようにしたから大丈夫さ。……じゃあ気をつけて。」

「……ありがとう、アルトゥール兄さん。……それじゃあみんな、行ってきます!」

「気をつけてな」

「死ぬなよ」

「いつでもいいから手紙よこしなさいよ」

「薬と毒を間違えないように……」

見送ってくれたみんなに別れを告げ、町の出口へ向かう。そこには、どこにでもつながっている、どこまでも行ける、道がある。

この町から他の町に向かって続く道を、ボクは歩き始めた。
まだ見ぬ未来へ、続く道を。

4 . E - m o l l

この村は、もう駄目だ。

村は、今まさに死に飲み込まれんとしている。

全ての始まりは、わずか一ヶ月前、一人の老人が病に倒れたことから始まった。

その死自体は、特に不自然なところは無かった。その老人は、もう年が年だったから、誰も何とも思わなかった。

だが、その直後から死ぬ人が急激に増え始めた。そしてあつという間に村の三分の一が死に絶え、ようやく誰もがこれはおかしいと気づいた。

しかし、時既に遅く、日に日に死者は増えていった。昨日まで元気に働いていた屈強な男が倒れ、楽しそうに笑っていた幼児が息を引き取る。村から逃げ出した人もいる。そして、今や村に残っているのは教会の牧師、雑貨屋の老婆、酒場のオヤジ、そして俺だけだ。地主は、真っ先に逃げ出した。村長は、三日前まで村中の家を見舞っていたが、二日前に倒れ、昨日亡くなった。

俺の周囲の人たちも例外では無かった。まず父が倒れ、続いて妹、そして弟が死に、先日母も死んだ。友人達もあつという間に死んでしまった。

この村に何が起きているのだろうか？ 今、分かっていることは何もない。できることも何もない。牧師はただ神に祈っているが、決して間違いでは無いと思う。こんな状況では、神に祈るより他にできることなど何もないからだ。もっとも、もうすでに神には見放されているような気もするが。

原因不明の伝染病、今はそういうことになっているため、近隣からこの村への立ち入り自体が禁じられたそうだ。調査のための人間が来ることもない。……無論そのこと自体は間違いでは無いだろう。原因が分からず、感染経路もはっきりしない以上、むやみに部外者がこの地に来るべきではない。……分かつてはいるが、どうしても『何とかしてくれないのか？』と言う考えは拭えない。

この先、何が起きるのか分からない中で、ただ一つ分かっていることがある。

……この村は、見捨てられたのだ。

5 . D - d u r

私は旅の吟遊詩人

昨日はあの街 今日はこの村

風の吹くまま 気の向くままに

雲の如くの流れ旅

今日の宿屋は村の酒場

小さな村のしけた酒場

常連、旅人、一見さん どんな人でもいらっしやい

お酒のつまみに 話はいかが？

噂話に言い伝え 話すことには事欠かないさ

なにせ私の生業は 人にいろいろ話すこと

今日のお客は酒場のお客

話のお代はお酒とおつまみ

それだけくれればもうオーケー

一晩中でも喋りましょう

あなたが家に帰るまで もしくは酔って寝てしまうまで

愚痴でもなんでも付き合いましょう

雄鶏が時を告げたなら 今晚はもうお開きです

またいつか縁があったなら 別の酒場で会いましょう

それではさよなら また会う日まで

あなたの幸運 お祈りします

私は旅の吟遊詩人

あなたの町の酒場にも

私は行くかもしれません

6・H・m o l l

今、世界は、戦いに覆われている。

もう五十年近く前のある日、とある国で起きた、あるプログラムのバグによる核ミサイルの誤射。それによって、人類史上三度目の世界大戦が始まった。

開始からすぐに、実戦における核弾頭の危険性が知れ渡ったせいか、核に核で報復し続けるという泥沼の事態は回避された。しかし、それまでに何十発かの核ミサイルが撃たれたせいで、世界の多くの土地が放射能汚染に悩まされることになった。核が撃ち込まれた土地に住んでいた人のうち大部分は死に絶え、生き残った少数の人たちも『ヒロシマ』や『ナガサキ』の例に漏れず、放射線障害に苦しんでいる。

そして、そんな事態になっているのにも関わらず、かつての超大国達は戦いを続けていた。多くの国は、とつくに疲弊しきつて戦いを止めているのに、だ。

この国も多くを失った。幸い核が打ち込まれることはなかったものの、空爆によりほとんどの都市が灰燼に帰し、人は戦いに駆り出され、多くがそのまま帰らぬ人となった。

俺も、何もかもを失った。家族、友人、顔見知り……もちろんそんなことは今この国ではごく当たり前のことなのだが。

今、国中には虚無感や無力感が漂っている。『ニッポン』のように焼け跡から大国を築き上げるほどの希望は残っていない。そもそも世界大戦その物がいつ終わるのか見当もつかない。……どうやら『戦争』というパンドラの箱を開けた奴は、希望が外に出る前に蓋を閉めてしまったらしい。

これからどうするか……この壊れかけた世界の全てを記すために、世界を見て回るのもよいかもしれない。人間の愚かさというものを、細大漏らさず後世に伝えるために。

今、焼け跡から、その一步を踏み出そう。

7 . A - d u r

僕は、夕日によってオレンジ色に染められた夕暮れの公園で、「彼」に出会った。

「彼」は、公園のベンチに腰掛け、傍らに『論語』を置き、その手に持った『新約聖書』を読んでいたが、僕が「彼」の目の前を通り過ぎようとしたとき、何の前触れもなしに僕を呼び止めた。

「君、何か大きな悩みを抱えているね？」

その言葉に僕は愕然とした。しかし、「彼」は僕の心の動揺を知つてか知らずか、そのまま話を続ける。

「もちろん悩むことは良いことだよ。だけれどそれに囚われ続けてはいけない。」

なおも本から目を逸らさずに「彼」は語り続ける。

「君は、君自身の悩み事に囚われて前に進む気持ちを失ってしまっている。……君自身がそうした状況を打開したいと思うのならば、

また僕のところにおいで。僕はいつでもここにいる。」

そして、最後に一言付け加えた。

「『探しなさい。そうすれば、見つかる。』」

これが、僕と「彼」との出会いだった。

俺は、アイツを許さない。

二年前、俺は心にそう誓った。アイツは俺の目の前で、俺の家族を皆殺しにした。その時の光景は今でも忘れられない。否、忘れてはいけない。忘れたとき、俺の存在意義は消える。……真っ先に親父を斬り殺したアイツは、次に驚きのあまり動けずにいたお袋を殺した。そして、殴りかかった俺の足を斬りつけると、泣きながら命乞いをする俺の妹を容赦なく殺した。それも一息にはなく、一本ずつ手足を斬り飛ばして、なるべく苦しみが長く続くように。獲物をじっくりといたぶるように。

そしてアイツは、「悔しいか？ 悔しいだろ？ 悔しいだろうなあ。悔しかつたら俺に恨みを晴らしにきな。まあそれまでに死ななければの話だがなあ。」といって高笑いしながら、何もできずに床に転がっていた俺を尻目に家を出て行った。

それからずっと、俺はくる日もくる日も心に復讐の炎を燃やし続けてきた。俺から全てを奪ったアイツ、アイツを探し出して、俺の家族が受けた痛みを、苦しみを、恐怖を、何千倍にもして返してやる。それを果たすまでは、死んでも死にきれない。

俺はアイツを探す旅の途中、ある小さな村に立ち寄った。その宿屋で一泊し、そのまま次の街に出発しようと、街の外れにあった修道院の前を通りがかった時だった。

「もしもし？　そこに行く旅の方、ちょっとよろしいですか？」

声をかけてきたのは、その修道女だろうか？　十七、八ぐらいの女が立っていた。

「なにやら心が疲れているみたいですよ？　よろしければお茶でも飲んでいきませんか？」

……なんだこいつは。

「あいにくだが先を急いでいるんでね。断らせてもらうよ。」

「まあそうおっしゃらずに。なんだかすごい顔してますよ？」

……ずいぶん人をナメた修道女だな。

「んなことはどうでもいいんだよ。とにかく俺は先を急ぐんでね、行かせてくれ。」

「だめです。えいっ！」

服を掴まれ、そのまま修道院の中に引きずりこまれてしまった。

「なにしゃがる！　ふざけんな！　離せ！」

「だめです。なんかあなたは人を殺しちやいそうな気がするんです。」

「

……なんだと？」

「ほら！　目がとっても怖いですよ！」

……とりあえず深呼吸をして、心を落ちつける。

「で、なんでそう思った？」

「カンです！」

「……………ハア！？」

「なんとなくそんな気がしました！　神に誓ってウソは言いません！」

なんなんだコイツは……そんなもんで見ず知らずのヤツをとっ捕まえるのかよ……

だが、この時、俺の運命の歯車は、全く別の方向に回り始めていた。それに気づくのはもっと先のことだったが。

ここはなんと美しい場所なのだろう。

私は、この大地を貫く山脈の中程、高原の奥にある開けた盆地にたどり着いた。そこでは、突き抜けるように晴れ渡った空を背景にして、名も知らぬ花々が咲き乱れ、その花畑の中を清らかな水の流れる小川が流れ、そして山の裾を覆うように森があり、小鳥たちが飛び交っている。

さすらいの果てに、たどり着いたこの地。ここには人はいない。小さな小屋を建て、晴れの日は畑を耕し、雨の日は雨音に耳を傾ける……そうして日々を過ごすにはちょうどいい場所だ。

しばらくこの場所を散策していると、ちょうど良い木陰を見つけた。花畑の中央にポツンと立っている木、いかなる理由でこの場所に一本だけ生えているのかは分からないが、まるでここに小屋を立てると言わんばかりに堂々と枝を広げている。

荷物を下ろし、木陰で休んでいると、今までの様々な思い出が頭をよぎる。だが、もうそれはただの思い出に過ぎない。もう過ぎ去った過去のものでしかない。

しばしのうたた寝の後、目を覚ませば、疲れがとれた体は、活動を要求する。

さて、まずは森に木を見に行こう。小屋の材料になるちょうどいい木に目星をつけておけば、明日からの小屋作りが多少ははかどるにちがいない。

太陽は、心地よい午後の日差しをこの大地に投げかけている。

どうやら気づかれてはいないようだ。

今、俺の前に目的の部屋のドアがある。この向こうに今回の目的であるブツがあるらしい。

扉を静に開き、部屋の中に侵入する。部屋の中にもやはり誰もいない。ここまで首尾よく進みすぎると、かえって敵の作中に嵌まってしまう気がするでもない。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。目的の部屋へ到着した。」

『『アンタレス』から『リゲル』へ。そのまま部屋の中央にあるセントラルコンピュータへ進んでください。』

「了解。」

そして指示通りに部屋の中央に配置してある巨大なオブジェクトに向かって進む。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。標的の前に到着。」

「了解しました。それではその装置の下部にメンテナンス用の、内部への入り口があるのでそこから標的の内部へ侵入してください。」

「了解。」

装置の下部を調べると、一ヶ所だけ四角い蓋のような箇所があった。そこに吸盤を貼り付け、取っ手を作り、それを手前に引っ張ると割と簡単に蓋が外れた。そこから内部に侵入し、蓋を閉める。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。標的の内部に侵入した。」

『了解しました。ではそこにある配線のうち、『M-03』と書いてある端子を探してください。』

明るさを絞ったライトで配線を辿ってゆくと、目的の端子が見つかった。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。端子を発見。」

「『アンタレス』から『リゲル』へ。それではその端子へ『ガジェット』の端子を接続し、『ガジェット』を起動してください。」

「了解。」

端子へプラグを繋ぎ、『ガジェット』の電源を入れる。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。ガジェットを起動した。」

「了解しました。それでは画面に表示された『実行』アイコンを選択し、五分ほど待機してください。」

「了解した。」

『ガジェット』の画面に表示された『実行』アイコンを選択する。すると画面に「実行中」の文字と、作業の進行状況がパーセントで表示された。

「……なあ、五分も待つのか？」

『もちろんです。』

「それじゃあ暇つぶしにでも付き合ってくれよ。ぶっちゃけこんな暗くて狭いところに五分も閉じこめられるなんて暇過ぎて寝ちまうよ。」

「戻ってくるまでが任務なんだから寝たらいろんなものがトぶけれど?。」

「そいつは勘弁願いたいな。つーかよ、なんで今回からコードネームで呼ぶようになったんだ？」

『その前に今までの文章をちゃんと読んできなさい。漢字が間違ってるわよ?。』

「……どこがだ?。」

『『作中』は『策中』が正しいと思うわ。』

「……んな細かいとこまで見てんのかよ……」

『もちろんよ。今あなたが暗闇の中で大欠伸をかましていることまでお見通しだけれど?。』

「んなっ！　なんで分かったんだ！？」

『第六勘よ。』

「結局『勘』なんだな……」

『まあね。』

「で、なんで今回からコードネームを使うことになったんだ？」

『上からのお達しよ。詳しいことは聞いてないけれど。』

「そうかい。で、なんでお前は『アンタレス』なんだ？」

『あら？　私は蠍座の女よ？』

「そんな理由かよ……」

『そう言うあなたこそ、なんでまた『リゲル』に？』

「お前が蠍なら俺は逃げ惑う『オリオン』ってところだろ？」

『あら？　あなたを毒牙にかけた覚えはないのだけれど？』

「言葉の綾だよ。」

『でもオリオンなら星がもう一つあったでしょう？　そっちの方が

有名じゃなくって？』

「あいにく俺は死にそうな年寄りじゃないんでね。」

『いつも年寄みたいにへばってグチばかり吐いてるのは誰かしら

？』

「きつとそいつは俺とそっくりな赤の他人だな。」

『その割にはずいぶんその赤の他人を見かけるんだけどねえ？』

「知らねーよ。運命の赤い糸じゃねえのか？」

『まあそれはないわね。』

「ちよつとは面白い反応を返せよ。つたく、色気もクソもねー。」

『そんなに色気が欲しかったら、いくらでもサービスするわよ？』

「いらねーな。想像しただけで鳥肌がたつよ。」

『そう？　遠慮しなくて良くってよ？』

「ああ、遠慮もへつたくれもねーよ。心の底からの本音だ。」

『まあ、おしゃべりはここまでね。そろそろ終わる頃合いだと思うのだけれど？』

みれば、『ガジェット』の画面には「Task Finished

！」と表示されていた。

「ああ、正解だ。終わってるぞ。」

『そうしたら、プラグを引き抜いて、さっき繋いであったケーブルを繋ぎ直して下さい。』

「まったく、切り替え速いな。」

最初に繋いであったケーブルを繋ぎ直す。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。作業完了。」

『了解しました。それでは速やかに合流地点へ移動してください。』

「了解。これより離脱する。」

そして、穴から這い出し、蓋を元通りに閉め、部屋を出ようとしたその時、背後に気配を感じた。

反射的に振り返ると、そこには一人の男が立っていた。

「やあ、お疲れさん。」

笑ってはいるものの、勘が「コイツは敵だ」と告げている。

「アンタはだれだ？」

まともな返事が返ってくることは期待していなかったが。案外あっさりと返事が返ってきた。

「ボクかい？ まあ端的に言っしまえば君の同業者といったところかな？」

同業者か……場合によっては非常に厄介だな……

「先に聞いておきたい。お前は敵か？ 味方か？」

味方ならばここで争う理由はない。だが敵ならば……

「まあ敵になるだろうね。」

「まったく……一番面倒臭いパターンじゃねえか。」

「あー、あまり期待しないで聞くんが、お互いに戦う気がないなら、ここは一つ穏便に済まそうぜ？ 俺はとっとと帰って酒が飲みたいんだ。」

「あいにくそういうわけにはいかないんだね。」

「まったく、空気読めよ。それとも空気嫁と遊びすぎて頭がイッチま

「ったか？」

「『読め』と『嫁』を掛けたのかい？ 全く面白くないね。」

「……んなことは解ってるよ。自分で言ってから『やべ、全然面白くねえ』って思ったからな。」

「ま、そういうわけだ。心配しなくてもここに僕の味方はいないから、タイマンでやれるよ？」

「男なら喧嘩はタイマンが基本だろ？」

「そう言いつつ、無線で状況を手短に連絡する。」

「『リゲル』から『アンタレス』へ。敵と遭遇。これより銭湯に入る。」

「あら？ 敵と悠長にお風呂で遊ぶのかしら？」

「ちくしょう！ なんでこういうときに言葉で遊ぶかね！？」

「冗談よ。だけど今回の目的はもう達成されているという事は忘れないように。」

「わーってるよ。『逃げるが勝ち』だってんだろ？ 気に食わねえがな。」

「『勝って』『利益を得る』のが勝利よ。」

「何回聞いたかね、その台詞。どっちにしてもとつとどこを脱出すりゃいいんだろ？」

「ボク、おうちに帰るまでが任務でちゅよ？」

「……うぜえな。敵さんも笑ってるぞ。」

「……いやwww すまないwww 何というか……君たち面白いなwww」

「そんなに面白いのか？ てかお前は。ちゃんねーか！？」

「ほら、今のうちに逃げなさい。」

「うつせーよ！」

「と言いつつも、この建物の地図を頭の中で素早く確認する。……逃走ルートは確定した。」

「さて、んじゃとつと撒いて一杯飲みに行きますか。」

10・Cis-mol1(後書き)

久しぶりの更新です。

なんか以前もこんなことを書いたような気が……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2983w/>

Preludes

2011年11月1日14時25分発行